

西周における「経済学」の意味に関する一考察¹

魯俏楚² 張厚泉³

要旨：本稿は、明治期日本の啓蒙思想家・西周（1829–1897）における「経済学」概念の形成過程を考察する。近代以前の漢字文化圏において「経済」は「経世済民」（国家統治と人民救済の政治実践）を意味した。西周は *Political Economy* の訳語として「経済学」と「制産学」を併用したが、従来の研究では両者の関係は未解明のままであり、訳語選択上の「迷い」として評価される傾向にあった。これに対し本稿は、テキスト精読に基づき、両者が対立・選択ではなく補完的關係にあることを論証する。すなわち「制産学」が生産活動と制度条件に焦点を当てるのに対し、「経済学」は社会秩序や人倫的調和を包含する総合的学問として構想された。さらに 1878 年の『経済学』の分析から、西周の経済学理解は分業・協働・信頼・法秩序を基盤とする社会の自律的運行法則の解明にあったことを示す。この概念形成は、荻生徂徠の「経世」思想を媒介として西洋の *Political Economy* を再構成した独自の思想的経路を体現するものである。

キーワード：西周、制産学、経済学、訳語、経世済民

1 はじめに

1.1 問題の所在

今日、「経済学 (Economics)」は社会科学の一分野として広く認知されている。『広辞苑』によれば、それは「社会科学の一分野で、経済現象を研究する学問」⁴と定義され、理論経済学、経済史学、経済政策などの分野から構成される。しかしこの「経済学」という用語自体が、歴史的には決して自明なものではなかった。周知のように、「経済学」は当初、アダム・スミスに代表される *Political Economy* の訳語として用いられていた。スミスによれば、*Political Economy* は国民の生活基盤を確保しつつその富を促進すると同時に、国家に十分な公共財政を確保することを目的とする学問である。その後、「経済学」は次第に *Economics* の訳語として用いられるようになり、現在の学問名称として定着するに至った。

この一見単純な訳語の変遷の背後には、実は「経済」という語が前近代から継承してきた複雑

¹ 本稿は、中国教育部人文社会科学研究計画基金項目「儒学思想在《百学连环》抽象概念译词形成过程中所起作用的研究」(21YJA740049)による成果の一部を含んでいる。

² 上海财经大学日語語言文学修士課程。連絡先：luqiaochu12@163.com

³ 上海财经大学教授。連絡先：zhanghouquan@sfue.edu.cn

⁴ 新村出編『広辞苑』（第四版）岩波書店、1991 年 11 月第四版発行、786 頁。

な意味の重なりがある。漢字文化圏において「経済」という語は、少なくとも東晋時代に遡る歴史を持ち、本来「経世済民」すなわち「国家を治め人民を救済する」という強い政治的・倫理的含意を帯びていた。したがって、西洋の *Political Economy* という「国民の富」を対象とする学問に、伝統的な「経世済民」の語を当てたことには、当然ながら本来一致しているべきものがかみ合わず、食い違っている状況が出てくる。

この食い違いにいち早く気づいた知識人の一人が西周であった。森県(1980:42-45)「西周『経済学ノ大旨』(『書陵部紀要』第32号所収)において、西周は「経済学」を再定義し、その学問としての独立性を理論的に基礎づけようとした。彼は、古代中国および日本における財政・食貨論が政治的・道徳的言説に従属していたことを指摘した上で、*Political Economy* を「経済学」と訳し、「経世済民」という従来の広義の概念から切り離し、財貨の管理・生産・蓄積を対象とする独立した学問領域として規定したのである。

1.2 先行研究の課題

しかしながら、このような概念規定がいかなる理論的構造のもとで形成されたのか、また「経世済民」という伝統的枠組みからどのような内在的転換を経て「経済学」という近代的概念へと再編成されたのかという点については、必ずしも十分に解明されているとはいえない。

先行研究の蓄積を概観すると、大きく二つの問題点が指摘できる。

第一に、西周の経済学受容に関する研究は、主として『制産学』(1870)や『利学』など1870年代初頭から中頃に執筆された論稿や翻訳著作に集中しており、後年の『経済学』(1878)はほとんど顧みられてこなかった。しかし『経済学』は西周による最後の経済関係の論稿であり、西が最終的に経済原理をどのように捉え、いかなる枠組みで定義したかを示す重要な史料である。これを見過ごすことは、西周の経済思想の全体的到達点を理解する上で大きな欠落となる。

第二に、西周が「制産学」と「経済学」という二つの訳語を併用した事実については、馮天瑜や中野泰雄などが指摘するところであるが、「制産学」と「経済学」の関係性についての十分な分析が行われたとはいえない。馮(2005:171)は語彙史の観点から、西周が両訳語のいずれを採用すべきかについて迷っていた可能性を推測する。また中野(1981:37)は経済学説史の観点から、「*Staatshuishoudkunde* を『制産之学』(経済学)としているが、今日の『財政学』であって、西が希望した *Economie* とは必ずしも一致しなかったのではあるまいか」という疑問を提起している。しかし、これらの指摘は重要であるものの、「迷い」や「不一致」という否定的な枠組みで理解するのではなく、西周が両語にいかなる役割を持つように意図していたのかを解明する必要がある。

1.3 本研究の目的と方法

そこで本研究は、西周の『経済学』および関連テキストの精読を通じて、訳語選択と経済思想との内在的関連を分析し、「経済学」という概念がいかなる思想的過程および概念再編の論理を

通じて成立したのかを明らかにすることを目的とする。具体的には、以下の三つの問いを設定する。

- (1) 西周は **Political Economy** をいかなる思想的枠組みを通じて理解し、翻訳したのか。
- (2) 「制産学」と「経済学」という二つの訳語は、西周の思想体系の中でどのように使い分けられ、また関連づけられていたのか。
- (3) 『経済学』(1878)における西周の論述から、彼の経済学に対する理解の最終的な特徴はいかなるものとして把握できるのか。

これらの問いに答えるために、本稿ではまず西周の生い立ちと学問的背景を確認した上で、「経済」という語の前近代的用法と近代的転換を整理する。次に、西周における翻訳行為の具体相について「制産学」と「経済学」の関係に焦点を当てて分析し、最後に『経済学』の内容を詳細に検討する。

2 西周の生い立ちと学問的背景

2.1 漢学的素養の形成

西周(1829-1897)は、石見国津和野藩(現在の島根県津和野町)に生まれた、明治期日本における代表的な啓蒙思想家の一人である。その思想的出発点は、徹底した漢学教育にあった。『西家略譜』によれば、西は6歳より祖父に就いて四書の素読を受けた。12歳より藩校である養老館に入り、山口慎斎に句読を受け、漢文を修めた。

西周が受けた啓蒙教育の特徴は、『孝経』を初学とし、その後順次四書を習得し、藩校・養老館に入学した時点では、すでに五経を学び終えていた点である。さらに『近思録』、『靖献遺言』、『蒙求』、『文選』などを通読し、「此年頃五経ヲ終近思録、靖献遺言、蒙求、文選、左国史漢ニ及ヒタリ而シテ始メテ詩ヲ賦スル」(大久保 1966: 724)という高い学力に達していた。その聡慧さは藩主に認められ、一代還俗、すなわちその一代限りで蘭医の身分を離れて学者として活動することを許された。

2.2 徂徠学との邂逅と思想的転換

藩校養老館で教授されていたのは、崎門学派の厳格な朱子学であり、西周は当初、程朱の学を孔孟の正統と深く信じていた。しかし転機が18歳の時に訪れた。西周が病臥中に手に取った荻生徂徠の『論語徴』は難読であったが、繰り返し読むうちにその文義に通じ、また程朱学とは異なる立場に強く啓発されたのである。

続いて『徂徠集』を精読するに及び、その体験は「十七年之大夢、一旦而醒覚」(大久保 1966: 5)と表現されるほどの劇的な覚醒をもたらした。ここで興味深いのは、西が徂徠学のどのような側面に共感したのかという点である。西は宋学の「厳毅窄迫」に対して徂徠学の「平易寛大」を評価し、「空理」に対して「礼楽」の実践を重視した。さらに、人間の「人欲」や「気質」を否定しない徂徠の考え方に深く共感した。このような徂徠学の特徴は、後の西周が西洋の功利

主義や社会科学を受容する際の思想的素地となった可能性が高い。

2.3 思想的連続性の問題

以上のように、西の思想的出発点は、朱子学から徂徠学へと展開する儒学に深く根差していた。本稿では、こうした背景を踏まえ、「経済学」という訳語を中心に、西がいかに関西概念を受容し再編成したのかを検討する。ここで重要なのは、西周における儒学（特に徂徠学）と西洋社会科学との関係を、「断絶」ではなく「連続性」の視点から捉えることである。西は伝統的な「経世済民」の思想枠組みを完全に捨て去ったのではなく、それを変容させながら西洋の Political Economy を再構成したと考えられる。具体的には、徂徠学の「礼楽」重視が、西周の経済学における「法秩序」の位置づけに影響を与えた可能性を本稿では検討する。本稿の仮説は、この連続性こそが西周の「経済学」概念の独自性を生み出したという点にある。

3 「経済」の語義と「経済学」の成立

3.1 近代以前における「経済」の語義

「経済学」という語は、「経済」を語幹とする複合語であり、その意味を正確に捉えるには、前近代における「経済」の用法を確認する必要がある。

現存する漢籍史料で「経済」が初めて確認されるのは、東晋時代の『晋書・殷浩伝』に収められた簡文帝（司馬昱）の書簡である。「足下沈識淹長，思綜通練，起而明之，足以経済（あなたは識見が深く、見識も広く、思考は総合的で練達している。それを実践に移し、明らかにすれば、国家経営を担うに十分である——筆者訳）」（房玄齡 1974 : 2044）。ここでは「経済」が国家経営の能力を指している。

隋唐以降、「経済」という語は伝記や墓誌銘に多く見られるようになる。「龍驤將軍、交州刺史檀和之忠果到列，思略経済，稟命攻討。」（沈約 2018 : 2610）、「君溫良恭儉，蘊経済之美才」（陳長安 1991 : 79）などの用例から、少なくとも隋唐期には「経済」という語が固定的な用法として確立していたことがわかる。その意味は主として「経世済民の才能」、すなわち国家を治め、時弊を救う政治的才能や方略を指していた。これらの用例では、「経済」はしばしば「才」「規」「策」などの語と結びつき、主体の統治能力や済世の志向を強調しており、典型的な政治的文脈に属している。

一方、「経済学」という語そのものの名詞としての用例は確認されず、「経済学問」と称されることが多かった。この「経済学問」もまた「経済」と同様、政治的才能を意味した。例えば清代の小説『紅樓夢』の中で、賈宝玉が史湘雲に「姑娘，請別的姊妹屋裡坐坐，我這裡仔細髒了你知経済学問的。」（曹雪芹・高鶚 2002 : 341）と述べる場面がある。また「還將経済學，來問道安師」（中華書局編集部編 1999 : 2918）のように、「学」を動詞として後置し、「経済を学ぶ」という意味で用いられる場合もあった。

日本においても、荻生徂徠はその著述の中で「経済」について論じており、その用法は伝統的

な政治的文脈に属している。「先王之道。安天下之道也。後世言經濟者。莫不祖述焉」(辻達也ほか編 1973 : 275) とある。これは、「経済」という語の政治的含意が中国に限らず、漢字文化圏で共有されていたことを示している。

ただし、「経済」という語が近代以前において、物質的生産や経営を意味する用法をまったく持たなかったわけではない。宋代以後、「経済」は国家財政や国家経営、さらには人民の生活を含意する用法としても用いられるようになった。明清期に流行した『経済文輯』、『経済言』、『経済文鈔』、『経済総論』、『皇朝経済文編』、『皇朝経済文新編』などの「経済」論著は、経世済民を目的とする政策論集であり、賦役、屯田、塩法、漕運など具体的かつ実務的な国家運営の課題が体系的に論じられている(馮 2005 : 162)。しかし、これらの議論はいずれも政治・倫理秩序の枠内にとどまっており、分析対象や方法において自律性をもった学問分野としての「経済学」が成立していたとは言い難い。

以上から明らかなように、前近代における「経済」および「経済学(問)」は、主として政治秩序の維持や統治の実践能力を意味する概念であり、物質的生産や市場活動を中心とする独立した学問分野を指すものではなかった。

3.2 近代以降における「経済学」の成立

日本における「経済学」の成立過程については、李憲昶(2008)が包括的かつ体系的な研究を行っている。東京大学は1893年に「理財学」を再び「経済学」と改称し、1908年には経済学科を政治学科から分離した。これは、Political Economy と Economics を学科制度上、区別し始めたことを意味する。東京大学における学科名称の確定は、「経済学」という訳語の最終的な定着に決定的な役割を果たした。最終的に、専修大学は1905年に「理財科」を「経済科」へ、自由主義経済思想を掲げ「理財学」を用いていた慶應義塾大学も1919年に「理財科」を「経済学科」へと改称した。これにより、日本において「経済学」という語は制度的に固定化された(李 2008 : 191-193)。

中国における「経済学」の成立については、孫大権(2023)が体系的な研究を行っている。孫は、日本語名詞「経済学」が中国に流入した後、「理財学」「生計学」などの訳語との競合に直面しただけでなく、「経済」「経済学」自体も従来の旧義との競合を受けていたと指摘する(孫 2023 : 57-62)。嚴復は、この学科を一貫して研究手段・方法である「計(算計・計較・計画)」を学科名にすべきと主張した。梁啓超らは嚴復の「計学」という訳語に反対し、「資生学」を用いたが、日本に亡命した後には「経済」という訳語を肯定的に評価し、最終的には「生計学学説沿革小史」において「生計学」を支持した(孫 2023 : 57-62)。こうした議論は、孫文が「惟経済二字、似稍近之」(孫中山 1982 : 510)という見解を公に表明するに至って沈静化した。政治的指導者であった孫文は、当時の公式な学科認定に対して決定的な影響力を持っていた。ここでは、「経済学」が近代的学問として再構成されつつも、その正統性を中国古典に求める姿勢が明確に見て

取れる。

同一の西洋概念を直面しながら、中国と日本の知識人が異なる訳語を選択した背景には、訳者の学問的関心や問題意識の差異が反映されている。この点を理解する上で、西周という個別の思想家の取り組みを詳細に検討することは、極めて有意義である。

4 西周における「経済学」概念の再構築

4.1 西周による Political Economy の翻訳と啓蒙

日本では、1862年に蕃書調所が編纂した英和辞書『英和对訳袖珍辞書』において、Political Economy に「経済学」という訳語が当てられ、Economy は「家事兒」「節約」と訳されている。同辞書編集主任は堀達之助(1823-1894)、その序文に協力者に西周助(周)・千村五郎・竹原勇四郎・箕作貞一郎(麟祥)の名が見える。また、聶長順(2006)は同時期に刊行された高橋新吉らによる『和譯英辞書』(American presbyterian mission press Shanghai, 1869)や、荒井郁之助編『英和对訳辞書』(小林新兵衛, 1872)においても、Political Economy は「経済学」、Economy は「家事・儉約・法」と訳されており、この訳語が定着しつつあったことがうかがえる(『光明日報』, 2006年1月6日)。

同じく1862年、西周は留学を目前に控え、松岡麟次郎に宛てた書簡の中で次のように述べている。「小生頃來西洋之性理之学、又経済学杯之一端を窺候處、実ニ可驚公平正大之論ニ而、從來所学漢説とは頗端を異ニシ候處も有之哉ニ相覺申候」(大久保 1966: 8) この記述から、当時の日本ではすでに Political Economy および Economy という概念に接し、学習されていたことが看取できる。西周もまた、留学以前の段階で、Political Economy の存在を認識していたのである。

さらに、「実ニ可驚公平正大之論」、「從來所学の漢説とは頗る異なるところも有之哉と覺候」という表現からは、西周にとって「経済学」が、すでに従来の漢学的知識の枠組みを超えるものとして意識されていたことがうかがえる。この時期に西周が用いた「経済学」が、完全に Political Economy の訳語として確定していたと断定することはできないものの、少なくとも儒学的文脈における「経済の学問」とは異質な概念へと移行しつつあったことは確かである。

4.2 「制産学」という訳語の提起

従来の「経済学」訳語研究では、西周が「経済学」という訳語に対して一定の躊躇を示していた可能性が指摘されている。その根拠として、『百学連環』において、Political Economy の訳語として用いられた「制産学」が独立した章節として掲げられている点が挙げられる。馮天瑜(2005)は、西周が両訳語のいずれを採用すべきかについて迷っていた可能性を推測している。また、中野(1981: 37)は「社会」概念の生成過程を論じる中で、『西周全集(第1巻)』の大久保解説を引用し、西周は「Staatshuishoudkunde を『制産之学』(経済学)としているが、それは今日でいう『財政学』に相当し、西が本来意図していた Economie とは必ずしも一致しなかったのではないかと指摘している。

しかし本稿では、この問題を「迷い」や「不一致」として消極的に評価するのではなく、西周が両語に対して意図的に異なる役割を付与していた可能性を積極的に読み解く必要があると考える。以下、『百学連環』における「制産学」の解説を詳細に検討しよう。

西周は『百学連環』(1870)の「制産学」において、Political Economy について次のような解説を施している。

Political Economy, 此イコノミーなる語は希臘の οἶκος, 英の house, 希の νομος, 英の rule にして、即ち家法といふ字なり。我が国にては之を身上、世代、台所向、勝手向、操廻、工面、などいふ意に同し。之を漢字に譯するときは居室、居家、等に当るなり。……之を唯イコノミーとのみ言ふときは一家のことにあたると雖も、今ホリチカルイコノミーといふときは即ち国家の制産に係はるところなり。近來津田氏世に之を譯して経済学と言へり。此語は經世済民より採り用へたる語にして、専ら活計のことを論するには適當せざるに似たり。故に余は孟子の制民之産の語より採りて、制産学と譯せり。凡そ民の産を制するには、必ず其主たるものなかるへからず。故にポリチカルイコノミーなる語に大概当るへしとの考へなり。(大久保 1981b : 235)

この記述から、以下の三点が重要である。

第一に、西周は Economy と Political Economy という二つの概念を明確に区別している。「之を唯イコノミーとのみ言ふときは一家のことにあたると雖も、今ホリチカルイコノミーといふときは即ち国家の制産に係はるところなり」(大久保 1981b : 235) という定義は、経済を個人や家族のレベルではなく国家レベルの問題として捉える視点を示している。

第二に、西周は既存の「経済学」という訳語に対して、ある種の不満を抱いていた。「此語は經世済民より採り用へたる語にして、専ら活計のことを論するには適當せざるに似たり」(大久保 1981b : 235) という判断は、伝統的な「經世済民」の語が持つ政治的、道徳的含意が、より実利的な「活計(生計)」の議論には必ずしも適合していないという認識を示している。

第三に、その代替として西周が採用したのが「制産学」であり、その典拠は『孟子』の「制民之産」にある。「制民之産」は『孟子・梁惠王上』の「是故明君制民之産，必使仰足以事父母，俯足以畜妻子，樂歲終身飽，凶年免于死亡」(孟子 2010 : 14) 基盤を定める」ことを意味し、政府あるいは君主が庶民に安定した生産条件を提供し、その生計を確保することを指す概念である。ここには政府あるいは君主による主導的役割をより強く強調する特徴がある。

西周が「制民之産」の語を典拠として「制産学」という訳語を提起したことは、彼の Political Economy 理解が単なる技術的知識の移入ではなく、伝統的な儒家の經世思想と西洋の政治経済学との接合点を模索する営為であったことを示している。

4.3 「制産学」と「経済学」の異同と補完関係

「制産学」という語を創出した後も、西周は引き続き「経済学」という語を用いており、両語に対してそれぞれ新たな論述と解釈を与えている。この事実は、両者が単純な選択関係にあるのではなく、西の思想体系の中で異なる機能を担っていた可能性を示唆する。

まず『百学連環』(1870—1873)「制産学」において、西周は次のように定義している。「国民富有の学にて、其富有を分賦して人民各之を持有し、及び之を消費するの法なり。古への政府の学となす如きは此制産の大禁物となすところなり」(大久保 1981b : 239)。この定義からは、西周がまだ西洋学術導入の初期段階にあり、「制産学」を「国民富有の学」として把握していたことがうかがえる。注目すべきは、西周が古代中国思想における「制民之産」と、近代的学科としての「制産学」とを意図的に区別し、後者を生産および富の生成に関わる法則を研究対象とする、政治から独立した学科であると位置づけている点である。そのため、神理学、哲学、政事学(法学)、計誌学などと並ぶ、『百学連環』における「心理上学」の体系の中に位置付けている。

一方、西周はその後『百学連環』第二編「政事学」において、「此の如く政事学、法学と稱すと雖も、皆な経済学中でより出るものにて、別つに政事学及び法学たるものあるにあらず」と述べている。「政事学」「法学」はすべて「経済学」から派生したものであると述べ、経済学を国家統治、社会秩序、民生の安定を包含する広大な学問として位置づけている。ここでは「経済学」という語が、「制産学」よりもさらに広い射程を持つ概念として用いられている点に注意が必要である。

さらに『経済学』(1878)において、西周は次のように述べている。

サーサー其處テ多人数ノ人数テモ聚相テ、成ルタケ廣々ト住居シル為方世間ノ定カ立テ
活計カ繁昌スル様ニ人々カ安堵シテ其為事ニ身ヲ委レル様ニト、其ノ作法ヲ見附エウトス
ルのカ即チ此ノ経済学ト云フ学問ノ目止タ。(大久保 1971 : 401)

この定義では、経済学は人々が安堵して生活し、社会全体が安定的に存立するための「作法」と「法則」を探究する学問とされている。ここでは富の生産と分配に限定されず、社会構造と共生秩序に着目した理解が明確に示されている。『兵賦論』(1878)の演説においても、西は「西欧ニ存スル事ハ東洲ニ施スモ南北地ヲ易フルモ古今時ヲ異ニスルモ住クトシテ然ラザルコトナシ。(中略)是経済学上、即チ社会上ニ就テ觀察スル所ニシテ此单元ノ適当ヲ見ルベシ」(大久保 1981a : 67)と述べており、経済学を、社会秩序を対象とする学問として捉え、地域や時代を超えて適用される社会的単元の妥当性を論じている。

以上の分析から、「制産学」と「経済学」の関係について以下のように整理することができる。「制産学」は主として生産活動・富の生成・制度条件に焦点を当てた *Political Economy* の翻訳であり、より狭く専門的な領域を指す。これに対して「経済学」は、後年になるにつれて、生産・分配のみならず社会秩序・人倫的調和・国家統治をも包含する総合的学問として構想されていく。両者は対立・選択の関係にあるのではなく、「制産学」が「経済学」の一部門あるいは基礎

領域を構成するという補完的な関係にあったと理解するのが妥当である。

このような西周の理解は、同時代の他の知識人と比較することで一層明確になる。例えば 1867 年に神田孝平は、イギリス経済学者ウィリアム・エリスの『*Outlines of Social Economy*』のオランダ語訳を底本に重訳を実施し、『経済小学』を刊行した。神田は同書の結びにおいて「経済ノ学包括極メテ廣シ此編ノ如キハ九牛ノ一毛ニ過キス」(神田 1900: 44)と述べ、経済学の射程がきわめて広範であることを認識していた点で西周と共通する。しかし神田が主として啓蒙的な入門書の翻訳に専心したのに対し、西周は自らの思想的枠組みの中で経済学の位置を再定義しようと試みた点に独自性がある。

また、嚴復の「計学」が学問の方法と手段を中心とした翻訳であるのに対し、西周の「経済学」は学問の目的と指導原理を基点とする翻訳であった。両者は明確に異なる姿勢を示すが、いずれも儒家伝統と西洋社会科学との間に新たな「経世の学」を構築しようとする試みであり、その差異は依拠した思想内容と用語の環境の差異を反映している。以上のように、西周における「経済学」概念の再構築とは、単なる訳語選択の問題にとどまらず、近代社会科学をいかに編成しなおすかという思想史的課題の一局面であったと結論づけることができる。

5 西周の経済学認識——『経済学』(1878)の分析

5.1 『経済学』の構成と基本問題

これまで西周の経済思想や経済学受容に関する先行研究において主に参照されてきたのは、『制産学』『利学』など 1870 年代中葉に執筆された論稿や翻訳著作である。これに対して、西周の『経済学』(1878)はほとんど顧みられてこなかった。しかし、『経済学』は西周による最後の経済関係論稿とも位置づけられる以上、西が最終的に経済原理をどのように捉え、いかなる枠組で定義したかを示す重要な史料であり、その思想的到達点を理解する上で看過できない意義を有している。

『経済学』は以下のように全四課で構成されている。

第一課 開ケタ国人と開ケヌ国人トノ生活ノ事

第二課 富トハ何ノ事タカ又富ヲ為出スハ何ノ様ニ為ルソト云フ事

第三課 一杯ノ飯ノ直段ノ分配並ニ小作年貢即チ地代ノ起原ノ事

第四課 働手ノ分前ノ事

西周はこれらの課を通じて、経済学に関わる五つの問題を提示している。すなわち、第一に「何ナ人ヲ開ケタ的、何ナ人ヲ開ケヌ的ト名ケルカ」、第二に「開ケタ人ト開ケヌ人トノ違ハ何處ニ有ルカ」、第三に「人ノ重ナ需用ハ何タカ」、第四に「開ケタ国テハ人カ心遣ナク疑念ナク各ノ職業ヲ励ムカ」、第五に「経済学ハ何ヲ教ヘル者カ」である。

以下では、これら五つの課題を軸に、西周の論述を検討する。

5.2 「開化」と分業——第一課の分析

第一課では、「開化した国民」と「未開化の蛮人」との対置を通じて、経済学の起点を文明と分業に求めている。西周は次のように述べた。

其タカラ又其人カ開ケタ国ニ居レハ開ケ、又国ニ居タ時ヨリモ要用ナ物カ何テモ速カニ容易ク澤山ニ得ラレル、又開ケタ人ハ唯其ノ需用ヲ廉ク得ル斗テ無ク、縦ヒ其物ハ外ノ處カラ出ル物テモ又定善ク得ル叟カ出來ル譬ヘハ東京ノ様ナ大都会テハ外ノ国ノ住人ノ助カ要ル、其ノ底テ仰イテ食物ヤ衣物カ出來ル、仙台ノ米タ的上州ノ絹タ的ヒ參州ノ綿タ的ノ様ニ、何モ此彼モ定テ輸入スル的タ。(大久保 1971 : 400)

ここから明らかなように、西周は「開化」を単なる物質的充足や技術的進歩として理解していたわけではなく、有用な財が円滑に流通する社会構造として理解していた。彼が重視したのは、それを支える分業関係と制度的基盤であった。東京という大都会を例に挙げ、仙台の米、上州の絹、參州の綿がもたらされる仕組みを説明することによって、西は地域間分業と市場流通の重要性を説得的に示している。

このような分業理解は、アダム・スミスの『国富論』における分業論の影響を強く受けていると考えられる。スミスはピン製造業の例を用いて分業が労働生産性を飛躍的に高めることを示したが、西周も同様に、分業と交換の拡大が「開化」の本質的特徴であると捉えていた。ただし、西周の議論はスミスのそれを単に紹介するにとどまらず、伝統的な儒家的社会観と接合させようとする独自の試みを示している点に注意が必要である。

5.3 富の概念と生産連鎖——第二課の分析

第二課では、富の概念と生産連鎖、さらに間接的貢献の問題が論じられる。西周は、「其需用ヲ給ハス為ニ成ル物ハ何テモ之ヲ富ト名ケル的タ、其故ニ食物ヤ衣物ヤ其外何テモ要ル物ヲ社会ニ給ハス者ハ皆其ノ富ヲ為出ス者タ」(大久保 1971 : 401) と述べ、富を「基本的な需要を満たす物品の総和」と捉える。

西周によれば、生活のために必需品を提供するものは何であれ「富」として呼ばれる。したがって、社会に生活の必需品を供給する者は、いずれも富を創造する主体であるとされる。その意味で、特定の階層に限らず、社会と係わるすべての人々が富の形成に参加しうる存在として捉えられているのである。この理解は、当時の西洋経済学がしばしば地主・資本家・労働者の三分類によって富の分配を論じていたのとは異なり、より包括的で平等的な富の観念を示している。

この理解に基づけば、「経済学」は個人の利得追求を分析する学問ではなく、社会的基盤の上に成立する学問となる。この点に、西周の経済学が倫理や政治秩序と切り離されることなく構想されている特徴が端的に示されている。

5.4 地代と都市化——第三課の分析

第三課では、地代の発生と都市化の進展が主題となる。西周は農耕社会を例に、国民生活を支える経済原理を説明し、地価上昇や地代発生を、生産技術の向上、地租制度の整備、商業活動の発展といった構造的要因から解釈する。

我カ邦テハ都会近邊テハ地面カ非常ニ高ク成タ、是ハ一ツニハ耕作カ彼ノ通りニ善ク開ケ地租ノ正税ハ悉ク地租カラ取ラレル故ト、一ツニハ商賈モ彼ノ通り廣ク盛ニ成タ故。

併シ上ニモ言タ様ニ、地主カ其ヲ無理ニ不正当テ取ルテハ無イ、其ノ割前ハ自然ノ正義ニ因テ正当ニ地主ニ当ルタ、是スカ彼ノ乏クテ要用ナ物ハ何テモ其ノ直打カ附ク理タト云フ譯タ、其處テ今地面カ全ク耕作セラレル様ニ成レハ段々ニ乏ク成ル、而テ人間ノ必用ナ生活ノ需用ハ土地カラ出来ル故ニ、誰テモ土地ニ就テ為ル仕事ニハ小作年貢又地代ヲ償ハ子ハ成ラヌ。(大久保 1971 : 409-410)

この記述で重要なのは、西周が地代の発生を地主の恣意的な搾取として道徳的に非難するのではなく、「自然ノ正義」に基づく経済的法則の帰結として理解している点である。土地の希少性と生活必需財としての特性から、地代の支払いは不可避免的なものとして説明されている。ここに、西周の経済現象の理解は自然的規則性に基づいていることが明確に示されている。

5.5 労働の二分法——第四課の分析

第四課では、労働概念が取り上げられる。

儲今働ト云フハ何ナ事タカト云ヘハ、働トハ体駆ヤ心ノカラ使フ事タ、勿論何ナ職業ヲ為ル人テモ彼此ノ事ニ少シモ其智慧ヲ用ヒスニ体駆ノカラ用ヒル者ハナク、又何ナ才能有テ敏捷ナ学者テモ總テ体駆ヲ使ハスニ居ル事ハ出来ヌ、是ハ固ヨリ知レタ事タカ、今一人ノ働ハ体駆的タト云ハ其ノ働ノ大半ハ体駆テ為ルト云意味テ、其ノ反対ニ智慧ノ働ト云フハ餘慶ニ氣ヲ使フ事ヲ云フ的タ、然ルニ其ノ心ノカノ能ク伸立ツタ的ハ体駆ノカノ能ク伸立ツタ的ヨリモ稀テ乏イ理タ、其故心ノカノ強ク賢イ的カ其ノ直打カ高イ的テ、事務ノ支配人カ外ノ働手ヨリ宜イ直ノ分ヲ取ル、是ハ勿論其ナ巧者ナ人ハ第一番ニ少イカラノ事タ。(大久保 1971 : 410)

西周はここで「労働」を単一の同質的行為としてではなく、身体的労働と知的労働に区別している。ただし重要なのは、いずれの職業においても両者が併存することを前提としつつ、その比重の差異によって労働の性格が異なることと論じている点である。このような理解は、肉体労働と精神労働を峻別する伝統的な身分制的社会観とは一線を画すものであり、より機能的な社会観に立脚している。

『経済学』は後半部分が未完に終わっているものの、現存部分からも西周の経済学に対する基本的認識は十分に読み取ることができる。要するに、『経済学』における西周の学問原理は、分業と協力を基礎とする社会秩序の自律的法則を解明することにその核心がある。西周が理解していた経済学は、自然的法則を記述する科学であると同時に、開化社会を成立させる規範的学問として構想されていたのである。

5.6 西周の経済学思想の特質

以上の『経済学』の分析から、西周の「経済学」に対する理解の中心的意義は、主に三点に集約できる。

第一に、経済学は社会の自律的調整法則を明らかにする学問として理解されている。西周は社会分業を、個々の職業の単なる集合としてではなく、多数の人々が関与する制度化された協業と分配の体系として捉えている。「譬へハ一膳飯カ一錢テ是ニ係タ人カ百人ト為レハ手間ヲ係ケタ時間モ平均タト為タナラハ、一人一錢ツ、ニ当ルテ有ラウ、故ニ其ノ人々カ受取ル分ヶ前ハ誠ニ僅カナ物ナレト確ト其分前ヲ得ルニハ相違無イ。」(大久保 1971:405) という記述からも明らかのように、西は分業が価格形成や所得分配を通じて社会全体を調整するメカニズムとして機能すると考えていた。

第二に、経済学は個人の行為と国家統治を結びつける重要な学問である。西周によれば、経済学の本質とは、個人相互の依存関係が集団を形成し、広範な居住空間を生み出す過程を明らかにすることにある。個々人の生活行為は、国家の政治経済的運行と不可分の関係にある。国家経済とは上位の政治的意志によって一方的に構築されるものではなく、個人の合理的行為を基盤として、分業と交換の累積によって自律的に形成・維持される社会的構造として理解されている。

第三に、経済学は伝統的儒家の義理観から近代的社会科学の論理へと移行する思想的経路を体現している。西周は、儒家の「民生を重んじ天下を安んずる」という思想的遺産を継承しつつも、社会運行を道徳判断ではなく法則的説明によって把握しようと試みた。この姿勢は、荻生徂徠の義理論を媒介として、西洋の Political Economy を受容・再構成する独自の思想的経路を示している。

6 結論——西周の思想的達成とその意義

本稿は、近代東アジアにおける「経済学」という術語の成立過程を再検討し、とりわけ西周における「経済学」の意味を考察してきた。以上の分析から、以下の四点を結論として提示することができる。

第一に、近代以前の漢字文化圏において、「経済」は主として「経世済民」という政治的实践を指す概念であり、政治的・倫理的な文脈に属する。これは物質生産や市場活動を対象とする独立した学問分野ではなかった。近代に入り、西洋の Political Economy が導入される過程において、

伝統的術語と新たな学術体系との間には不可避的な概念的緊張が生じた。

第二に、日本では、経済学を表す重要な術語が混用される時期を経た後、「経済学」は大学制度における学科名称として公式に採用されたことで制度的に確立し、最終的に近代学問の術語として定着した。その後中国に伝わり、「理財学」「計学」「生計学」などの訳語との長期的な競合を経て受容された。西周はこの概念形成において重要な役割を果たした。彼はこの概念転換の初期段階において、一定の媒介的役割を担っていたと考えられる。

第三に、西周は、徂徠学を基盤とする学問的素養を出発点としつつ、西洋の *Political Economy* を単なる技術的知識ではなく、国家と社会を支える総合的学問として理解した。西は「経済学」を用いる一方で、「制産学」などの訳語も併せて模索した。関連テキストを精読すると、「制産学」は「経済学」を否定あるいは代替する概念ではなく、生産活動や制度条件に焦点を当てることによって、政治経済学の対象と機能を明確化しようとする概念であったことが確認できる。両者の関係は、1870 年の『百学連環』「制産学」から 1878 年の『経済学』への時間的发展の過程として理解するのが妥当である。以上の考察から、「経済学」は「経世済民」の学問から価値中立的な社会科学へと一挙に転換したのではなく、翻訳を媒介とした段階的かつ試行的な再構築を経て成立した概念であることが明確となった。

第四に、『経済学』の解読を通じて、西周の「経済学」は、倫理や政治から切り離された純粋な技術的学問ではなく、法律・政治・教育と結びついた総合的な社会科学であったことが確認できる。このように、西周における「経済学」の理解は、既成理論の単純な移植ではなく、近代国家制度への転換という歴史的文脈の中で、経済現象を制度的に再構成しようとする試みであったと評価できる。この点は、今日の経済学が人文社会科学の一分野として位置づけられているという事実を理解する上でも、歴史的・思想的観点からの重要な示唆を与えるものである。

最後に、本研究の限界と今後の課題を指摘しておきたい。本稿では主として西周個人の思想形成に焦点を当てたが、同時代の他の啓蒙思想家との比較という視点は必ずしも十分に展開できなかった。今後の課題として、第一に福沢諭吉の『西洋事情』『文明論之概略』における経済関連記述と西周のそれとの比較分析、第二に神田孝平の『経済小学』と西周の『経済学』との翻訳戦略の差異の検討、第三に津田真道の経済関連論稿との比較が必要である。また、西周の『経済学』が未完に終わっていることもあり、その全貌を捉え切れていない可能性がある。さらに、西周の経済思想がその後の日本における経済学の制度化（東京大学における学科設置や教科書編纂など）にどのような影響を与えたのかという観点からの検討も今後の課題である。これらの課題については、本稿の議論を踏まえた上で、改めて考察を深めていきたい。

参考文献

日本語文献

神田孝平訳 『経済小学』、東京：紀伊国屋源兵衛、1900 年 19-44 頁

大久保利謙編 『西周全集 (第1巻)』, 東京: 宗高書房, 1966年 5-8頁

大久保利謙編 『西周全集 (第2巻)』, 東京: 宗高書房, 1971年初版/1971年再版 401-407頁

大久保利謙編 a 『西周全集 (第3巻)』, 東京: 宗高書房, 1981年 67-724頁

大久保利謙編 b 『西周全集 (第4巻)』, 東京: 宗高書房, 1981年 18-593頁

辻達也・西田太一郎・丸山真男・吉川幸次郎編 『荻生徂徠 日本思想大系 36』, 東京: 岩波書店, 1973年 200-234頁

中野泰雄 「『社会』概念の生成——西周と社会科学」, 『亜細亜大学経済学紀要』7-1, 1981年 21-42頁

新村出編 『広辞苑』第四版, 東京: 岩波書店, 1991年 786頁

杉山忠平 「西周と経済学」, 『思想』679号, 1981年 1-18頁

福沢諭吉 『福沢全集 (第1巻)』, 東京: 国民図書, 1925-1926年 508-509頁

森県 「西周『経済学ノ大旨』」, 『書陵部紀要』第32号, 東京: 宮内庁書陵部, 1980年 48-53頁

森野榮一 「西周における政治経済」, 『自然と実学』4号, 2013年 103-115頁

李憲昶 「漢字文化圏における Political Economy と Economics の翻訳」, 大阪: 関西大学出版部, 2008年 167-211頁

中国語文献

曹雪芹・高鶚 『紅樓夢』, 北京: 人民文学出版社, 2002年 341頁

陳長安主編 『隋唐五代墓誌彙編・洛陽卷第12冊』, 天津: 天津古籍出版社, 1991年 79頁

房玄齡 『晋書 (第7巻)』, 北京: 中華書局, 1974年 2044頁

馮天瑜ほか 『中国語、日本語、西洋語間の相互伝播と翻訳のプロセスにおける『経済』という概念の変遷』, 『日本研究』31号, 2005年 159-190頁

孟子 『孟子』, 北京: 中華書局, 2010年 (方勇訳注) 14頁

聶長順 『近代漢字術語誤植問題初探——「経済」を例として』, 『光明日報』, 2006年 1月6日

沈約 『宋書 (点校本二十四史修訂本)』, 北京: 中華書局, 2018年 2610頁

孫大權 『術語革命——中国近代経済学主要術語の形成』, 北京: 社会科学文献出版社, 2023年 57-65頁

孫中山 『孫中山全集 (第二巻)』, 北京: 中華書局, 1982年 510頁

嚴復訳 『原富』, 北京: 商務印書館, 1981年 7頁

中華書局編集部編 『全唐詩』, 北京: 中華書局, 1999年 2918頁

英語文献

Smith, Adam. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations* (Liberty Fund, 1981)

The Formation of Nishi Amane's Concept of "Economics" and Its Significance in Intellectual History

Abstract: In the process of introducing the Western term "Political Economy", Nishi Amane (1829–1897), an Enlightenment thinker in Japan's Meiji period, used two different Japanese renderings: *keizaigaku* and *seisangaku*. Previous studies have often regarded this phenomenon as a sign of Nishi's hesitation or confusion in choosing between the two terms, without fully elucidating the intrinsic relationship between them. Through a close reading of Nishi's relevant texts, this study argues that *seisangaku* and *keizaigaku* were not in a relationship of opposition or mutual exclusion, but rather one of functional complementarity. Specifically, *seisangaku* focused primarily on productive activities and institutional frameworks, whereas *keizaigaku* was conceived as a comprehensive discipline encompassing social order and social and ethical harmony. An analysis of Nishi's later monograph *Keizaigaku* (1878) further reveals that his understanding of economics was not merely a theory of the production and distribution of wealth, but a discipline that elucidates the autonomous laws of social functioning based on the division of labor, cooperation, trust, and legal order. This conceptual formation embodies a distinctive intellectual path through which Nishi creatively reconstructed Western Political Economics by mediating it with Ogyū Sorai's thought on "statecraft" (*keisei*). This study contributes to our understanding of the generative logic of the term "economics" in modern East Asia and the mechanism of intellectual integration between Chinese and Western thought.

Keywords: Nishi Amane; *seisangaku* (this was Nishi Amane's translation of Political Economy.); *keizaigaku* (economics); translated terms; *keisei saimin* (governing the world and saving the people)

